瀬戸内市障害者就労支援・ふれあいプロジェクト事業成果書

観光・宿泊施設である岡山いこいの村に委託して実施した。既存施設を利用・改修して、シルバー人材センター、ボランティア、いこいの村職員等の指導により、食品班、陶芸班、染織班、園芸班、その他試験研究班の五班に別れて事業を開始した。

障害者が作業に慣れるまで比較的時間がかかり、販売品とするまでは、相当の訓練期間が必要なことがわかった。一方で、技術習得には進歩が見られるので経験さえ積めば、一定の成果は出せると思われる。農作業では高齢者の指導を受けて栽培をおこない、収穫の喜びを得ることが出来た。パン工房では、試食品を観光客に食べてもらい、ふれあいの時間を過ごすことができた。全体の作業を通じ、障害者個人の持っている個性を引き出すことが出来たと思われる。この活動が企業への雇用、農家での農作業従事への足がかりとなればと思う。事業成果の詳細を班別に述べると下記のとおりである。

食品班　（延利用者数　２月 ６人、３月 ９人）

一般消費者への販売に結びつけるため、スワンベーカリーとの協力を目指し、ヤマト福祉財団に申請したが、規定条件に満たないため、断念した。このため、独自でパンを作っていくこととし、手作り焼きの出来る石釜工房に変更して、パン作り経験者の指導のもとに訓練を行っている。

出来上がった試作品は、見学に立ち寄った観光客に試食してもらうなど、ふれあいが図れたことは大きな収穫であった。また、石釜工房の整備・清掃などの作業も意欲的に行った。石釜ではパン、ピザ、クッキーなどが出来るようになり、現在販売のため保健所への許可申請事務を進めている。今後は、観光客ともっとふれあいの機会の場を増やすためにも、宿泊客が集中する土日祝日に運営できるようにしたい。障害者及び保護者の意識を変えなければならないが、土日祝日に本人が活動しやすい体系に変えていくことが検討課題である。

パン工房で訓練している利用者

パン、ピザ等を焼く石釜

陶芸班　（延利用者数　1月 4人、2月 4人、3月 4人）

備前焼作家の方に協力をお願いし、実施した。備前焼作家の方に焼き物の型を作ってもらい、箸置き、皿を作製して、楽しく陶芸に取り組んだ。しかし、商品として販売できるようにするためには、高い技術と長期間の訓練が必要だということがわかった。今後は、能力の個人差もあると思うので技術を要する物より単純で簡単な作品を主体に考えていきたい。

陶芸を行うにあたり、地元の陶芸会館の方と話し合いを重ね、陶芸会館で焼いてもらうことが出来た。陶芸会館では障害者の方がこの施設を利用して活動をしてはどうかと言う提案をいただき、この研究事業に取り組んだことで、地域の中で創作活動が可能な資源を発見することが出来た。

障害者が陶芸会館で作製した箸置き等の陶芸品

染織班　（延利用者数２月 2人、3月 4人）

染織経験者にボランティアで指導してもらい草木染めを始めたが、思うような色が出ず、試行錯誤を重ねている。ヨモギやさくらやコーヒーかすなど数パターンやってみているが、商品化出来るまでの色合いが出ていない。施設の周りにさくらの木が多く、自然になるサクランボが沢山できるため、障害者とともにサクランボを摘んで色を抽出しているところである。今後はハンカチ、タオルなど商品化できる物に取り組む予定である。

障害者がコーヒーかす染めで試作した染織品

園芸班　（延利用者数　1月 10人、2月 8人、3月 9人）

シルバー人材センターとボランティアの協力を得て、事業を開始した。農場では、野菜づくり（ジャガイモ･イチゴなど）・山羊やエミューのえさやり等多くの作業の体験が出来ている。イチゴ、野菜用ビニールハウス設営の手伝い、観光客イチゴ狩り体験に協力し、観光客とのふれあいを図ることが出来た。自分達で栽培したイチゴや野菜を収穫して食べることに喜びを感じた。年末に行った芋ほりは、地元園児を招待し、障害者と和気あいあいの交流が図れた。園児は障害者に対する偏見が無く、障害者の人も子どもも気がねがなく、お互い気持ちが通じたふれあいができた。山羊、エミューの餌やりは、最初は怖い人もいたが、動物との触れ合いで序々に解消され、積極的に行なうことが出来た。

また、試験研究班で利用した鳥小屋の止まり木・えさ箱を作ったり、しいたけのほだ木づくりを行なった。障害者の方で仕事に対する意欲が少なくなっていたが、昔やっていた大工の仕事を思い出し、いきいきと作業に取り組め出したという方もいた。

花の栽培は、施設の美化に役立っている。屋外で庭園に花壇苗の植え付けを行ったりする作業が、日常室内作業の多い障害者にとって、気持ちのリフレッシュにつながった。

ホテルという観光業での障害者の雇用の場については、野外の施設管理や、厨房での役割など、受け入れるホテル側もこのプロジェクトで障害者の利用の経験をすることによって、どの部分なら受け入れが出来るかということが実感できた。今後の本格的な就労支援のきっかけとなると思っている。

地元園児を招待してのジャガイモ収穫

ジャガイモ収穫後の記念撮影

フロント前で販売されているジャガイモ

生後 2～3 日のひよこ

鶏小屋内のえさ箱は障害者制作

鶏小屋内のとまり木は障害者制作

障害者が世話をしているエミュー

障害者が世話をしているやぎ

障害者が栽培した花

障害者が栽培した花を施設内花壇へ

その他試験研究班

ひよこの成育を通じた試験研究は、川崎医療福祉大学臨床心理学科学生の協力により、被験者を一般家庭から募って実施した。命の大切さを学ぶこと、人間関係の育成を目的とした取組みとなった。現在、大学生が研究論文のとりまとめの途中であり、成果発表へは至っていないが、今後は障害者等のメンタルスクールの実施が出来るよう、成果をフィードバックしていきたい。

ニート（引きこもり）は呼びかけを行い、１名見学に来たが、残念ながら作業参加するには至らなかった。今後はもっと積極的なアピールが必要である。

先にも述べたが、庭園管理や除草作業など障害者の作業に対する取組の状況を見ることが、今後、ホテル等観光業での障害者雇用につなげて行くことが出来るかどうかの判断材料となった。

階段そばの除草は障害者がおこなった